

二十二願事ノート

山上正尊

20240513 真宗本願寺メソッド講座会読

202440731 本山安居

往還分齊	判決	2024	1
会読案	出拠		4
類文		4
釈名		5
義相①	『大経 第二十二願の願意		5
義相②	『論註の釈意		8
②の1	不虛作住持功德	8
②の2	『論註 三願的証の釈意	8
義相③	『教行信証』証文類の引意		9
③の1	科段	9
③の2	正釋	10
義相④	宗祖の還相回向釋の特色		12
順縁の教化	化身土文類	14	
逆縁の教化		14	

判者 北塔和上 典義 天岸和上

【題意】

宗祖は『教行信証』『教文類』に浄土真宗の大綱を「謹案浄土真宗有二種回向。一者往相、二者還相。就往相回向有真実教行信証」と二回向四法をもって示された。この二種回向の義意と分齊を明確にし、両者の位置づけの混乱から生じる誤った見解におちいらぬよう注意をうながす。

【出拠】

『教行信証』『教文類』の真宗大綱に、

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、

二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

(『聖典全書』二・九)

『同』『証文類』『還相釈』に、

二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。

すなはちこれ必至補処の願より出でたり。また一生補処の願と名

づく。また還相回向の願と名づくべきなり。

(『聖典全書』二・一三七)

を根本とする。そのほか『浄土文類聚鈔』『三経往生文類』(広木)『和讃』など類文は多い。

なお名目の所依は、『論註』下巻「起観生信章」の回向門の文である。

【釈名】

「往」は往相回向の略であり、『還』は還相回向の略である。「往相」とは「往生浄土の相状」であり。「還相」は「往生浄土の相状」に対すれば「還来穢国の相状」の意である。

ただし、宗祖の「証文類」の「還相釈」によれば、往相の証果たる無上涅槃の極果を極めた者の必然として展開する利他摂化のための因相示現として「従果還因の相状」の意である。

「回向」は菩提回向、衆生回向、實際回向といわれる中の衆生回向すなわち利他回向のことであり、『論註』に「おほよそ回向の名義を釈せば、いはく、おのれが所集の一切の功德をもって一切衆生に施与し、ともに仏道に向かへしむるなり」(『聖典全書』三・四一五)と示されたことをいう。

宗祖は『論註』下巻の「其本釈」の深意により、本願力による如来の利他回向の義とされて、如来が成就された一切の功德を名号に摂めて衆生に回施されると領解された。

「分齊」とは「分」は区分、判別、判別、見わけること。「齊」は辺際の「際」と同意で他のものとのふれあう際(きわ)を言い、互いの領域の接しぐあいをいう。

合釈すると、往相は「往生浄土の相状」であり、還相は「還来穢国」「従果還因」の「相状」として、回向されている。その区分と適応範囲を確定する。

【義相】

一、『往生論註』の二種回向釈

往還回向の語を初めて用いられたのは曇鸞大師の『論註』下巻「起観生信章」の回向門の釈である。そこでは願生行者が行ずる五念門二利の行の中、礼拝、讚嘆、作願、觀察の前四念門は自利行をあらわし、第五の回向門は利他行をあらわしていた。この五念二利の因によって浄土に往生した行者は、その果徳として五功德門の徳相が恵まれる。その近門、大会衆門、宅門、屋門の前四門は初地から八地への自利の徳用をあらわし、第五門の園林遊戯地門は還来穢国し自在に衆生教化を為す利他行を意味している。

この五念門中の回向門は浄土へ往生するための回向行であるから往相回向といい、五功德門中の園林遊戯地門は浄土より穢国に還来して行ずる回向行であるから、還相回向と名づけられたのである。

ただし『論註』においては、二回向共に願生の行者が修する往生および成仏のための利他回向行であった。

一、宗祖の二種回向釈

宗祖は「教文類」に「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり」（『聖典全書』二・九）。また『浄土文類聚鈔』には「しかるに本願力の回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり」（『聖典全書』二・二六二）と、往還二回向を如来の本願力回向の相と領解された。

往相回向の四法の中、「教」は能詮の言教たる『大経』を指し、「行」「信」は往生の因をあらわし、「証」はその果をあらわしている。その「行」は所信の法たる名号を指し、「信」は機受の能信をあらわしている。行者は信心決定と同時に攝取不捨の利益によって正定聚に住せしめられる。「証」は真実報土の往生の証果であり、臨終一念の夕べ大般涅槃を超証することという。

「証文類」の「還相釈」には「二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり」（『聖典全書』二・一三七）、また「還相の利益は利他の正意を顕すなり」（『聖典全書』二・一五一）と釈されたように、往生即成仏の果として無上涅槃を極めた者は、その必然として従果還因、広門示現して無碍自在の利他摂化を展開することを還相回向と釈されている。この時は「還来穢国の相状」は他方摂化の一相となる。

一、往還二回向の分齊を明らかにする

往相回向「往生浄土の相状」における往生は難思議往生といわれるもので、往生即成仏の証果である真実報土の往生を指していた。ただ宗祖は、「即得往生」「難思議往生」とに独自の往生釈を示されている。特に第十八願成就文の「即得往生」については、現生に「得はうべきことをえたりといふ。真実信心をうれば：すなわち、とき・日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを往生をうとはたまへるなり」（『聖典全書』二・六六三）。正定聚の左訓には「往生すべき身とさだまるなり」と釈されている。これは信益同時の現生の利益をあらわされたもので、当来の難思議往生を指すものではない。

還相回向は「証文類」の「還相釈」では『浄土論』『論註』の文を引用し、さらに『論註』下巻の菩薩の四種正修行、五功德門等のすべてを従果還因の大慈大悲の妙相と釈されている。このことは宗祖が、「証文類」の初めに、第十一願「必至滅度之願」（『聖典全書』二・一三二）

を標し、往相の証果の体を「利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり」（『聖典全書』二・一三三）と指定され、その「滅度」を転釈されて「一如」におさめられたことによる。その「一如」に具わる無量の徳相を従果還因、広門示現してあらわされたのが宗祖の還相の積意である。

一、現生における信後還相論の是非

宗祖には、信一念に正定聚に住することについて、先の『一念多念文意』のように正定聚に入ることを「往生をう」（『聖典全書』二・六六三）とされる釈と、『末灯鈔』第一通に「撰取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心のさだまるとき往生またさだまるなり」（『聖典全書』二・七七七）と言われたように、「往生」を当来の難思議往生のこととし、信一念に当来の往生が決定することとする釈がある。しかし、いずれの場合も現生に正定聚に住することであって、此土において難思議往生を得ると言われることはない。したがって、浄土真宗において現生に難思議往生を得ることは語れない。

また、還相は従果還因の菩薩による自在の利他教化をあらわす語で、信心の行者は現生に正定聚に住する益を得ると雖も、現実には生涯煩惱具足の凡夫である。その凡夫に、自在の利他摂化は不可能である。

特に「行文類」に引用された『如来会』『重誓偈』の「まさに無上菩提の因を証すべし」の文には、「証の字…験なり」（『聖典全書』二・一六）と細註が施されて「証」を「験」の意とされている。この「験」とは、「結果としてあらわれたもの」「因が因であることを証験」された「しるし」をあらわす文字で、因をあらわすものではない。

以上のことから、浄土真宗にあっては現生における信後還相を語ることは誤りといわねばならない。

『大経』

（『聖典全書』一巻26頁） 当面の読み方

（梯實圓和上『教信証の宗教構造』384頁） 当面の読み方

たとひわれ仏を得たらんに、

他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らしめん。

その本願ありて、自在に化せんとする所の衆生の為のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめ、常倫に超出して諸地の行現前し、普賢の徳を修習せんものを除く。若ししからずは、正覚を取らじ。

『論註』下

（『聖典全書』一巻 觀察体相章 衆生世間 仏 不虛作住持功德 51頁、三願的証528頁）

（『註釈版』七祖篇134頁、156頁）

設ひ我仏を得むに、

他方仏土の諸の菩薩衆、我が国に來生せば、究竟して必ず一生補処に至らむ。

其の本願の自在に化せむとする所ありて、衆生の為の故に、

弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめむをば除く。

常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せむ。

若ししからずは正覚を取らじ。

〔証文類〕（『註釈版』316頁）

〈たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して究竟じてかならず一生補処に至らん。〉

その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正真の道を立せしめんをば除く。

常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。

もししからずは正覚を取らじ〉

類文

『略典』（『聖典全書』二巻265頁）（『註釈版』482頁）

【14】 二つに還相回向といふは、すなはち利他教化地の益なり。すなはちこれ必

至補処の願（第二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づけ、また還相回向の願と名づくべし。

『浄土三経往生文類』（『聖典全書』二卷584頁）（『註釈版』629頁）

【7】 一つに還相の回向といふは、『浄土論』にいはく、「本願力の回向をもつてのゆゑに、これを出第五門と名づく」といへり。これは還相の回向なり。一生補処の悲願（第二十二願）にあらはれたり。

大慈大悲の願（第二十二願）、『大経』（上）にのたまはく、「たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生すれば、究竟してかならず一生補処に至る。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除かんと。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは、正覚を取らじ」と。「文」この悲願は、如来の還相回向の御ちかひなり。

『如来二種廻向文』（『聖典全書』二卷725頁）

釈名

二十二 法蔵菩薩所誓の第二十二願
願事 願いのこと。内容。

義相① 『大経』第二十二願の願意

『大経』（梯實圓和上『教行信証の宗教構造』384頁）当面の読み方

たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らしめん。

その本願ありて、自在に化せんとする所の衆生の為のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめ、常倫に超出して諸地の行現前し、普賢の徳を修習せんものを除く。
若ししからずは、正覚を取らじ。

『如来会』（『聖典全書』一卷303頁）

(一一一)

若し我成佛せむに、彼の國中に於ける所有る菩薩、大菩提に於て、咸悉く位階一生補處ならむ。

唯大願ある諸菩薩等、諸の衆生の爲に、精進の甲よろひを被り、勤めて利益を行じ、大涅槃を修して、諸佛國に遍して菩薩の行を行じ、一切の諸佛如來を供養して、洎沙の衆生を安立し無上覺に住せしめ、修する所の諸行、復た（於）前に勝れ、普賢の道を行じて（而）出離を得むおば除く。
若不爾者、不取菩提。

（藤田宏達『梵本和訳 無量寿経・阿弥陀経』79頁）

（二一）

もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、かしこの仏国土に生まれた者となるであろう衆生たちが、

—— 大いなる鎧を身にまとい、一切の世間（の人々）の利益のために（鎧を）身にまとい、一切の世間の利益のために専心し、一切の世間を般涅槃せしめるために専心し、一切の世界において菩薩の行を実践しようと欲し、一切の仏たちを尊崇しようと欲し、ガンジス河の砂に等しい衆生たちを無上なる正等覺に安立させ、さらにその上の行に向かい、サマンタパドラ（普賢）の行に決定しているこれら菩薩・大士たちの、特別な諸誓願（がある場合）を除いて ——

すべて、無上なる正等覺に向けて、一生だけ「ここに」つながれた者（一生所繫）とならないようであるならば、その限り、わたくしは無上なる正等覺をさとりません。

Q 文意如何

A （梯實圓和上『教行信証の宗教構造』385頁）

他方仏國の菩薩達が安樂國に生まれてきたならば、必ず菩薩の最高位である一生補処の位に至らせよう。

ただし、その菩薩が、浄土に生まれてくる前に、次のような願いをもっているものは、その限りではない。すなわち浄土に生まれたならば、衆生を自在に救うことのできる身になろうという決意に身を固めて、多くの善行を積み、すべてのものを救おうと願い、そのために、諸仏の国々へ行つてあらゆる如來を供養し、無量の衆生を救うて悟りを得しめるという自利利他の実践を行おう。それについて菩薩の通常の階位を超え、その場で普賢菩薩がなされるような大悲の行を実践したい。このような願いを持っているものはその通りにしてあげようと誓われたものである。

Q 願事如何。

A 往生した者を一生補処に至らしめること

Q 穢土に還つて衆生救済することは願事ではないのか。

A 阿弥陀仏の願事ではない。願生の菩薩が願ったことで、それを阿弥陀仏が許可されているだけである。

sacen me bhagavan bodhiprāptasya tatra buddhaksetre ye sattavāh pratyājātā
 もしも わたくしが 世尊よ 覺りを得たときに かしこの 仏国土に 衆生たちが 生まれた者と
 bhaveyus te sarve naikajātīpratibaddhāh syur anuttarāyām samyaksambodhau
 なるであろう すべて 一生だけ〔ここに〕つながれた者とならないようであるならば 無上なる 正等覺に向けて

sthāpayitvā pranidhānaviśesāms tesām eva bodhisattvānām mahāsattvānām
 を除いて 特別な諸誓願〔がある場合〕を これら 菩薩 大士たちの

mahāsamnāhasamnaddhānām sarvalokārthasamnaddhānām sarvalokārthābhiyuktānām
 大いなる鏡を身にまとい 一切の世間〔の人々〕の利益のために〔鏡を〕身にまとい 一切の世間の利益のために専心し

sarvalokaparinirvāpitābhiyuktānām sarvalokadhātuṣu bodhisattvacaryām caritukāmānām
 一切の世間を般涅槃せしめるために専心し 一切の世界において 菩薩の行を 実践しよう欲し

sarvabuddhān satkartukāmānām gaṅgānadīvālukāsamān sattvān anuttarāyām
 一切の仏たちを 尊崇しよう欲し ガンジス河の砂に等しい 衆生たちを 無上なる

samyaksambodhau pratiṣṭhāpakānām bhūyaś cottaricaryābhimukhānām
 正等覺に 安立させ さらにその上の行に向かい

samantabhadracaryāniyatānām
 サマンタパドラ（普賢）の行に決定している

mā tāvad aham anuttarām samyaksambodhim abhisambudhyeyam
 ません その限り わたくしは 無上なる 正等覺を さとり

- ◆サンスクリットには3つの性〔男性、中性、女性〕、3つの数〔単数、両数、複数〕、8つの格〔主格、対格、具格、為格、従格、属格、処格、呼格〕がある。
- ◆文字圏の語 はすべて男性・複数・属格のかたちであり、「tesām eva bodhisattvānām mahāsattvānām」の説明であることが分かる。
- ◆したがって、「除」の範囲が「samantabhadracaryāniyatānām」までであることがわかる。

義相② 『論註』の釈意

②の1 不虛作住持功德

Q 不虛作住持功德とは『浄土論』のどの言葉の釋か？

A 「觀仏本願力 遇無空過者 能令速滿足 功德大宝海」(『聖典全書』一卷509頁) 本願力によって速やかに功德を満足するはたらきを指す。

Q 具体的には誰が功德を満足されるのか？

A 未証淨心の菩薩が淨心上地の菩薩と等しく寂滅平等法身を証得する

【90】

すなはちかの仏を見たてまつれば、未証淨心の菩薩畢竟じて平等

法身を証得することを得て、淨心の菩薩と上地のもろもろの菩薩と畢竟

じて同じく寂滅平等を得るがゆゑなり。(510)

未証淨心の菩薩 初地以上七地以還のもろもろの菩薩

淨心上地の菩薩 八地以上の法性生身の菩薩

Q 七地と八地の違いは？

A 八地は七地沈空の難を超えている。

Q 七地沈空の難とは

A 仏道を捨てた状態。七地において自身が寂滅を得るので、上は求めるべき仏もない、下は度すべき衆生もない。

(『聖典全書』一卷511頁) (『註釈版』七祖篇133頁)

菩薩、七地のうちにおいて大寂滅を得れば、上に諸仏の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず。仏道を捨てて實際を証せんと欲す。

Q 第二十二願の引意如何

A 浄土に往生すれば、修行の階梯を一つずつ経ていくという常倫を超出して、速やかに寂滅平等を得ることができるのは本願力によることの証明に第二十二願を引用する。

Q 「畢竟じて同じく寂滅平等を得る」なら、少しづつ階梯を経ているじゃないか。

A 一応は往生して畢竟じて等しくなると示すが、再往は往生見仏即時に等しくなることを明かす証文として第二十二願が挙げられる。

Q 第二十二願のどの言葉によって証明してるのか

A 超出常倫。

菩薩の十地の階位を順を追って進んでいくのではなく、初地からいきなり八地、十地あるいは等覺の位まで超越することを可能ならしめるのが本願力の妙用である。

自利に安住して利他の精神を忘れ大乘菩薩道を失する難をいう。また身心ともに完全に無に帰する小乗の無余涅槃(灰身滅智)の難でもある

②の2 『論註』三願的証の釈意

Q 三願的証とは何か

A

本願力によって速やかに菩提(仏果)を得る

(不虛作住持功德)

未証淨心の菩薩が階梯を経ずに寂滅平等法身を得る

(三願的証)

即得成就阿耨多羅三藐三菩提の因縁は仏力である

⑱ 往生

⑲ 正定聚

⑳ 一生補処

義相③ 『教行信証』「証文類」の引意

③の1 科段

〔『聖典全書』二巻付録29頁〕

二章 還相の悲用を明かす【還相廻向釋】

一節 正積

一項 直明……………二言還相

二項 出扱……………則是出於

二節 引文【引文】

一項 經説は註を指す……………願註論故

二項 広く師釈を引く

一科 略して別に還相廻向あることを示す

一目 還相の義を挙ぐ〔浄土論〕……………浄土論曰

二目 還相の名を出す〔論註〕……………論註曰還

二科 広く還相摂化の徳相を顕す〔論註〕

一目 摂化の徳相を顕す

(一) 願の大義を明かす(觀察体相)

(I) 一生補処を釈す……………又言即見 138

(II) 自在摂化を釈す……………觀菩薩者 140

(二) 願の由来を示す(浄入願心)

(I) 願心莊嚴を明かす……………已下是解 142

(II) 広略相入を明かす……………略説入一 143

二目 摂化の始末を証す

(一) 因

(I) 因体を挙示す(善巧摂化)……………善巧揚化 145

(II) 菩提心の義を示す(障菩提門・順菩提門・名義摂対)

……………障菩提門 146

(III) 因徳を結成す(願事成就)……………願事成就 149

(二) 果(通じて上因に酬ゆるの果徳を明かす)

(利行満足) …………… 利行満足
第三章 総じて往還の義を結ぶ【往還結釋】…………… 爾者大聖 151
尾題…………… 願淨土眞 152

Q 第二十二願はどこに引用されるか
A 2度引用されていると見える。

①願名を挙げた後、還相回向釋を牒して經文を挙げる。

『聖典全書』二卷137頁) (『註釈版』 313頁)

『註論』(論註)に頭れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

②『論註』引文(觀察体相章) (『聖典全書』二卷139頁) (『註釈版』 316頁)

Q ①經文としての引用と②釈文としての引用と違いは？

A 同意。繁重をさけて一度目を避けるか。

③の2 正釋

(直明)

利他教化地の益

『略典』(『聖典全書』二卷265頁) (『註釈版』 482-483頁)

必至滅度 「利他教化地の果」 証果の体

還相回向 「利他教化地の益」 証果の用

(願名)

Q 「証書類」にある第二十二願の願名如何。

A (『聖典全書』二卷137頁) (『註釈版』 313頁)

【14】二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願(第二十二願)より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』(論註)に頭れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

必至補処の願 補処Ⅱ(仏陀の座処を補う)Ⅱ仏陀になること

一生補処の願 仏陀になることが必ず定まっている菩薩の最高位に至らしめる願

今生の一生が終われば

仏陀になることが必ず定まっている菩薩の最高位に即かしめる願

還相回向の願

『論註』の還相は還來穢国の相状がすなわち回向の相

(往相) 淨土願生者が礼拝・讚嘆・作願・觀察の前四念の自利の功德を

他に回向する利他する

(還相) 淨土に往生した菩薩が五功德門の前四門(近大宅屋)の自利行徳を

園林遊戯地して利他する

宗祖の場合 阿弥陀仏が衆生に往相と還相を回向する

還相

從果還因

本国位相

他方摂化（還來穢國）

Q 「亦名」と「亦可名」の違いは何か

A 前二名は願文より名付けた。「還相回向」は宗祖の義名。

Q 他の願名ありや。

A

大慈大悲の願

Q 言葉の出処如何

A

『浄土三経往生文類』（『聖典全書』二卷584頁）（『註釈版』630頁）

大慈大悲の願、『大経』にのたまはく、「設我得仏……

『如来二種廻向文』（『聖典全書』二卷725頁）（『註釈版』723頁）

このころは一生補処の大願にあらわれたり。大慈大悲誓願は『大経』にのたまはく

「設我得仏……

『略典』（『聖典全書』二卷265頁）（『註釈版』483頁）

大慈大悲の弘誓

Q 名義如何

A 「大」の字は仏の勝れた徳をあらわす時に用いる。

『論註』上 性功德（『聖典全書』一卷459頁）（『註釈版』七祖篇61頁最後の字）

慈悲に三縁あり。

一には衆生縁、これ小悲なり。

二には法縁、これ中悲なり。

三には無縁、これ大悲なり。大悲はすなはち出世の善なり。

Q 第二十二願をなぜ「大慈大悲の願」というか

A 仏果より十方に至りて衆生を利益することを誓ってあるから

Q 依りどころ如何。

A 仏の至極の慈悲を「普賢の徳」という

「讚弥陀偈讚」（二七）（『聖典全書』二卷343頁）

安樂无量の大菩薩

一生補處にいたるなり

普賢の徳に歸してこそ

穢國にかならず化するなれ

（左訓）文明本 大慈大悲をまふすなり

国宝真筆本・顕智書写本（表記は違うが同文）

我ら衆生極樂にまいりなば、大慈大悲を發して十方に至りて衆生を利益するなり

仏の至極の慈悲を普賢ともうすなり

▲参考▼ 一生補処

(WE版新纂浄土宗大辞典)

菩薩の階位における最高位。迷いの生存として今生の一度だけ縛られている者、次の生存では仏に
なることができる位にある菩薩のこと。⑤ ekajñi praubaddha⑥ skye ba gcig gis thogs pa
一生所繫しよけとも訳されるほか、略して補処ともいう。玄一の『無量寿経記』上によれば、一生
補処の菩薩には穢土の菩薩についていうと住定(相好業を修す)・位定(仏地に近い)・一生補処(一
生を終えての後、仏処を補つ)・最後生(成仏の身)の四種があるとされ、位次については異説が
認められる。『菩薩本業経』下に「これを名づけて補処となす、十より十法を成じてより、現世に
紹代無上正真の道を、最正覚をなして天下を度脱す」(正蔵一〇・四五〇下)とあるのは今生にお
いて成仏する最後生の菩薩を指し、一方『阿閼仏国経あしゅくぶつこくきょう』上「発意受慧品」
に「一仏刹より復た一仏刹に遊び、即ち兜率天に住し、一生補処の法を得」(正蔵一一・七五四下)
とするのは兜率天に住した後、次生にて仏処を補つ菩薩を指している。『観弥勒菩薩上生兜率天経』
には兜率天に上生した弥勒菩薩を補処の菩薩とし当来世に下生して成道するとするが、これは『阿
閼仏国経』と同様の説である。『無量寿経』上の第二十二必至補処ひつしふしよ願では「もし我れ
仏を得たらんに、他方仏土の諸もろの菩薩衆、我が国に來生せば、究竟して必ず一生補処に至らん」
(聖典一・二二七/浄全一・八)とあり、これについて道光は『無量寿経鈔』五において、極樂の
菩薩は一地から一地へと階次を経るのではなく、補処の位に超えて至ることが誓われているとする
(浄全一四・九七下)。また一仏の浄土にどつして多くの補処がいるのかという問題について、一
生とは時分遠近の区別についていうのではないとし、速やかに成仏するという点については、道理
としては他方随縁の国土に往つてのことであるとす(同九八下〜九下)。したがって道光も次生
にて仏処を補つと解している。また『大阿弥陀経』『平等覚経』や『観世音菩薩授記経』等では阿
弥陀仏が入滅した後観世音菩薩と大勢至菩薩とが相次いで補処することを説き、この二菩薩を補
処の菩薩と位置づけている。観世音菩薩については『四十八卷伝』一三に「そもそも清水寺の靈像
は、極樂浄土には、一生補処の薩埵」(聖典六・一四〇)とあり、『翼贊』一三では『群疑論』を引
いて位次を「第十地ノ終リ、等覺ノ薩埵」とした上で、一生を「此ノ位仏ニ近フシテ」と釈し、補
処を「ホトケ教化ノ処ヲニギハシ給フヲ補処ト云ナリ」(浄全一六・二二五下)と右と同様に解し
ている。この他『阿弥陀経』には「極樂国土には、衆生生ずる者は、皆これ阿鞞跋致あびばつちな
り。その中に多く一生補処あり。その数甚だ多し。これ算数の能く知る所にあらず」(聖典一・三
一八/浄全一・五三)として、極樂には一生補処の菩薩が多くなることを説いている。

義相④ 宗祖の還相回向釋の特色

現生で一生補処(因より果に至る)

一生補処Ⅱ弥勒菩薩

弥勒と等し

現生正定聚

往生即成仏して一生補処(果より因に還る)

Q 宗祖の還相の釈相如何。

A 還相が『証文類』に明かされるように、往生即成仏(滅度)するとその証果の悲用として

直ちに従果還因して、因人の相を顕現し衆生を教導する。

願事	『大経』文当面 (1、26)	論註 (1、511~528)	宗祖 (11、139)
所顕	一生補処 往生した者を一生補処 に至らしめること	超出常倫 本願力によって速やかに 菩提(仏果)を得る (不虛作住持功德) 未証淨心の菩薩が階梯を 經ずに寂滅平等法身を得 る (三願的証) 即得成就阿耨多羅三藐三 菩提の因縁は仏力である ⑮ 往生 ⑰ 正定聚 ⑱ 一生補処	一生補処・還相回向 本国位相と他方撰化 全体が還相
設我得仏 他方仏土 諸菩薩衆 來生我國 究竟必至 一生補処 除其本願 自在所化 為衆生故 被弘誓鎧 積累徳本 度脱一切 遊諸仏國 修菩薩行 供養十方 諸仏如來 開化恒沙 無量衆生 使立無上 正真之道 超出常倫 諸地之行 現前修習 普賢之徳 若不爾者 不取正覺	除 本国位相 他方撰化	除 無上正真之道に立せし めむをば除く 常倫諸地の行を超出し、 現前に普賢の徳を修習せむ	除 本国位相 他方撰化 無上正真之道を立せしめむをば除く 常倫に超出し、 諸地の行現前し、 普賢の徳を修習せむ
超出常倫	一生補処に至らず 他方撰化をすること	階梯を經ずに菩提を得ること (七地沈空なし)	從因至果の常倫を超出する

順縁の教化（化身土文類）

- Q 阿弥陀仏が群生海を救済する構造如何
- A 往還二廻向
- Q 往相が廻向されることによる利他教化のすがたは？
- A 真実の教行信証。利他教化の果まで。
- Q 還相が廻向されることによる利他教化のすがたは？
- A 利他教化の益。従果還因の菩薩。
- Q 従果還因の菩薩が群生海を利益するすがた如何。
- A 聖道門

「自力利他教化地」（観経隠顕2.196）

▶煩惱に惑わされ、邪道に迷っている衆生に

煩惱の厭うべきことを知らせ、正見に導かれた正しい生き方を指示し、仏法の真理性を顕示する。

要門

「福德蔵を顕説して群生海を誘引し、阿弥陀如来、本誓願を発してあまねく諸有海を化したまふ。すでにして悲願います。修諸功德の願（第十九願）と名づと名く。」（要門釈2.183）

▶自力修行の破綻を契機に浄土を願わせる

真門

「阿弥陀如来は本と果遂の願「この果遂の願とは二十願なり」を発して、諸有の群生海を悲引したまへり。」（真門釈2.201）

▶諸行から念仏へと行を転換させる

ついで自力心を捨てさせて第十八願の本願力回向の法門に転入させる。

Q 権化方便の法門が還相の菩薩の利他教化であったという文証如何。

A 『末灯鈔』第1通（2.778）

聖道といふは、すでに佛になりたまへるひとの、われらがこゝろをすゝめんがために、佛心宗・眞言宗・法華宗・華嚴宗・三論宗等の大乘至極の教なり。佛心宗といふは、この世にひろまる禪宗これなり。また法相宗・成實宗・俱舍宗等の權教、小乗等の教なり。これみな聖道門なり。權教といふは、すなはちすでに佛になりたまへる佛・菩薩の、かりにさまざまのかたちをあらはしてすゝめたまふがゆへに權といふなり。

逆縁の教化

- Q 南都北嶺から宗祖はどんな目にあったか
- A 法然聖人一門の破壊。兄弟子が死刑にされた。ご自身も流罪になった。
- Q そんな相手を還相の人と見たのか
- A はい。釈尊のサンガに重ねて見ていたと窺う。

『略典』（2.266）

【18】 ここをもつて、浄土の縁、熟して、調達（提婆達多）、闍王（阿闍世王）をして逆害を興ぜしめ、濁世の機を憫れんで、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。つらつらかれを思ひ、静かにこれを念ずるに、達多・闍世、博く仁慈を施し、弥陀・釈迦、深く素懐を顕せり。これによりて、論主（天親）は廣大無碍の淨信を宣布し、あまねく雑染堪忍の群生を開化す。宗師（曇鸞）は往還大悲の回向を顕示して、ねんごろに他利・利他の深義を弘宣せり。聖権の化益、あまねく一切凡愚を利せんがため、廣大の心行、ただ逆悪闍提を引せんと欲してなり。

『本典』総序

しかればすなはち淨邦縁熟して、調達（提婆達多）、闍世（阿闍世）をして逆害を興ぜしむ。淨業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これすなはち権化の仁、斉しく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、まさしく逆謗闍提を恵まんと欲す。

「觀經讚」78・79頁

(78) 弥陀・釈迦方便して 阿難・目連・富樓那・韋提

達多・闍王・頻婆娑羅 耆婆・月光・行雨等

(79) 大聖おのおのもろともに 凡愚底下のつみひとを

逆悪もらさぬ誓願に 方便引入せしめけり

Q 調達（提婆達多）、闍王（阿闍世王）の逆害とは？

A 提婆達多は教団の秩序を乱し（破和合僧）釈尊を殺そうとした（殺阿羅漢・出仏身血）、阿闍世王は（殺父殺母）

Q そんな奴がどうして権化の仁と味わえるのか。答者は安居というサンガを破壊しようとして、父を殺すような相手を仰ぐことができるか

A 死ぬまで許さない

Q ご開山はできたのか

A 逆縁の中で許せない人を「つらつらかれを思ひ、静かにこれを念ずるに」と思慮なさっている。

Q どう受け止めたのか

A 「いかりはらだちそねみねたむころ」が「臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」という私のすがたを教えて下さった方だと受け止めたと窺う。『一多文意』2.679)

Q 権化の仁が出現した目的は？

A 「聖権の化益、あまねく一切凡愚を利せんがため、廣大の心行、ただ逆悪闍提を引せんと欲してなり。」

※間違いやご指摘、お気づきの点がございましたら教えて下さい。山上正尊

〒599・8125 大阪府堺市東区西野521 旭照寺

senjakuhoengan@gmail.com